

観光地の振興、地域の雇用促進の期待も

温泉郷など観光地を抱える自治体では、介護旅行を地域経済の活性化と地元の雇用創出につなげようと、行政が補助金を出してトラベルヘルパーの養成と誘客に乗り出しているところもある。

その一つが山形県最上町だ。稲作と土建業の町だったが20年ほど前から福祉の町づくりに力を入れてきた。保健・医療・福祉を一体化した「ウエルネスタウン構想」は全国的に注目された。人口は減り続けて現在約9900人。七つ

の温泉はあるが山を隔てた宮城県大崎市の鳴子温泉にはかなわない。そこで着目したのが介護旅行を組み入れた新たな観光スタイルだった。

昨年10月末に都内の3家族5人とトラベルヘルパー3人が参加したモニターツアーを実施した。東北新幹線古川駅で最上観光協会のスタッフが出迎え紅葉を見ながら同町内へ案内。介護施設と温泉旅館が一緒になった「保養センターもがみ」に宿泊し、受け入れ側と

しての問題点などを検証した。同町は受講料を補助してトラベルヘルパー資格取得者を4人養成する計画で、首都圏からの介護旅行の受け皿作りを急いでいる。

静岡県東伊豆町は緊急雇用創出事業の補助金を活用してトラベルヘルパーを3人養成した。いずれも地元50歳の女性で介護福祉士としての仕事歴がある人たち。同町も熱川温泉など六つの温泉郷があるが観光不況の波をものにかぶり、バブル期の91年には190万人が来ていた観光客が昨年は83万人にまで減少している。

ルパー東伊豆」(吉間厚子代表)を立ち上げ、温泉旅館での入浴介助や観光への同行などのサービスを始めている。来年春には法人化を目指し、観光と介護を組み合わせた地域振興の一翼を担っていく意気込みを見せている。

雇用対策が課題になっている沖縄県うるま市は国の補助金を活用し、トラベルヘルパーを数千人養成する計画を持っている。「琉球王国のグスクと関連遺産群」として世界遺産に登録された勝連城址など豊かな観光資源があり、介護旅行の受け入れで観光業界が盛り返すことも狙っている。

旅は「心と体のリハビリ」

NPO法人日本トラベルヘルパー協会 篠塚恭一 理事長に聞く



— 介護旅行を始めるきっかけは。 —

篠塚氏 旅行会社に入り添乗員を務めた後、人材派遣会社に移り派遣添乗員などサービス現場の人材育成の仕事をしていました。91年に独立して観光などホスピタリティー産業への人材サービス会社「SPI」を創業し、95年から介

護旅行を専門に手掛ける「あ・える倶楽部」を立ち上げました。サービス産業にとって、最も大事なことはいかにリピートしていただくかということです。一生のお付き合いになる「生涯顧客」をどれだけ確保できるかです。

添乗員として働いていたころ、お客さんの一人の70代の女性が

「自分でスーツケースを持てなくなったら旅行も終わりにしなくては」と話していたことが、介護旅行の必要性に気付いたきっかけです。そのような人を手助けする旅行を作りたいと思いました。私自身もホームヘルパーの資格をとり、トラベルヘルパーという仕事を手探りで作ってきました。

— 介護と旅行は結びつきにくかったのでは? —

篠塚氏 それまでの旅行商品は、基本的にはお金と時間があつて健康な人を対象にしていました。戦後の高度成長を支えたサラリーマンが定年になり特段の趣味もないので旅行に行こうか、という人たちが増えて旅行の大衆化が進んできました。しかし、さらに高齢になり体が不自由になるとどこへも出かけられない人が多くなりま

て成り立つようにしたいと考えました。

— バリアフリー化も進んでいます。 —

篠塚氏 確かにいわゆる交通バリアフリー法が施行されて駅のエレベーターが増え、バスがノンステップ化されるなど公共交通機関をはじめハード面のバリアフリーが充実してきました。

しかし、まだまだ十分とは言えません。お参りにいく田舎のお墓のバリアフリー化を待っていたらいつになるかわかりません。専門のトラベルヘルパーが介助することでソフト面のバリアフリー化が進むと思います。

— NPO法人で人材養成を始め

た。篠塚氏 介護旅行のニーズはますます増えていきます。トラベルヘルパーが全国各地に配置されれば、ずっと旅に同行しなくても受け入れ先で引き継ぐことができ、お客様の負担もそれだけ減ることになります。人材を養成していくためにはこれまで培ってきたノウハウを公開していく必要があると考え、06年にNPO法人日本トラベルヘルパー協会を立ち上げました。

私の課長補佐時代

文部省(当時)での勤務の後、課長補佐時代は、外局の文化庁のほか、大学、衆議院、千葉市とさまざまな場に身を置いて仕事をしました。

東京工業大学研究協力課赴任当時は、高温超伝導の物質探索が世界的な競争となっていた時期でした。着任してまずは学内を巡ろうと長津田キャンパスを訪れたところ、講義室で研究発表会が開催され、立ち見が出る熱気が。飛び入りで聴いていると学内同士ながら丁々発止のやり取りが続く、外の夕焼けが宵闇になっても止まるところを知りません。私心なく真剣勝負をする真理の探究者にはサポートも全力で、という學術振興の原点を得た場です。

さまざまな「チーム」で気持ちを一つに

ざあいの議論すら難しくなっていた問題に「臨調方式」で次の展開を図ろうとする取り組みです。法案自体は短いのですが、出向者もそれぞれの出身母体の立場を離れ、国民と社会のためにどうすればよいかと知恵を寄せ合う濃い時間がありました。

千葉市教育委員会では、子供たちの宿泊自然体験施設の候補地を探して教

文化庁次長 河村 潤子(56)

育長と共に山林を歩いたり、大学から提案を受けて市内の国公立図書館ネットワークの協議会を立ち上げたりと、生涯学習にかかわるいくつもの新しい仕事に第一歩から参画できました。そしてまた、力量のある学校の先生方と話し合うと、「国や県からの通達の類はできるだけ少なくして、現場の創意に任せてほしい」という心情をたびたび伺ったものです。



所属する「チーム」は次々に変わりましたが、ユニホームを着ればそのメンバーとして気持ちを一つに仕事をす

【経歴】かわむら・じゅんこ 京都府生まれ。79年東大法学部(当時)入省。中学校課長、学術研究助成課長、私学部長、文教施設企画部長などを経て12年1月から現職。

特集 介護旅行